



通常学級における特別に支援を必要とする 児童への支援の在り方

大館市立扇田小学校 教諭 間嶋 祐樹

1 特別支援教育を進める意味

- (1) どのクラスにも発達障害の子がいる。今までの指導が通用せずに苦勞することが多い。
- (2) 発達障害の子への対応がうまくいかずその結果、学校全体の大きな課題となる。
- (3) 不登校やニート問題などに絡んでいるのも発達障害である。日本の社会の喫緊の課題でもある。

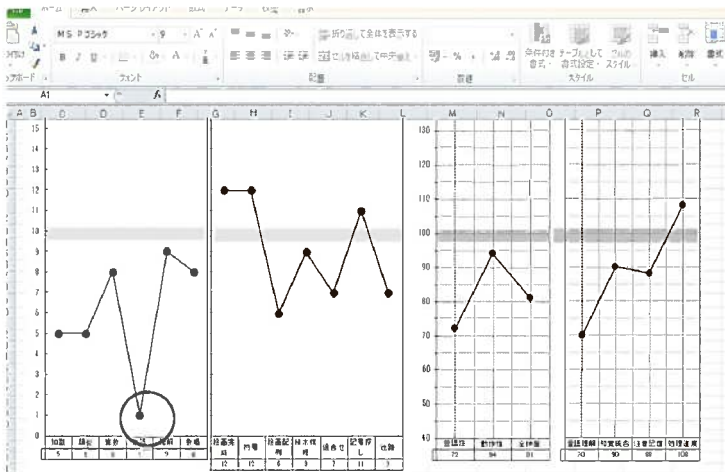
2 支援の対象

児童だけを支援しては、片手落ちである。支援の対象は

児童・教師・保護者である。

3 発達障害とは何か

発達の凸凹 + 不適応 = 発達障害



次のような子がいる。
「ばか、うるせえ、しね。」等と暴言を吐く乱暴な子ども。
検査をすると、「単語」が著しく落ちている。言葉が身についていない。したがって、知っている数少ない言葉で悪口を言う。言葉が少ないからすぐに手が出てしまう。
これを叱責しても意味はない。むしろ自己肯定感が下がり、状況は悪化する。
この子の発達のアンバランスを知り、叱責が多くなつての二次障害（不適応）へ進むというパターンを防ぐのが大事。

4 保護者への支援

大変な子どもと、その保護者をセットでとらえる。

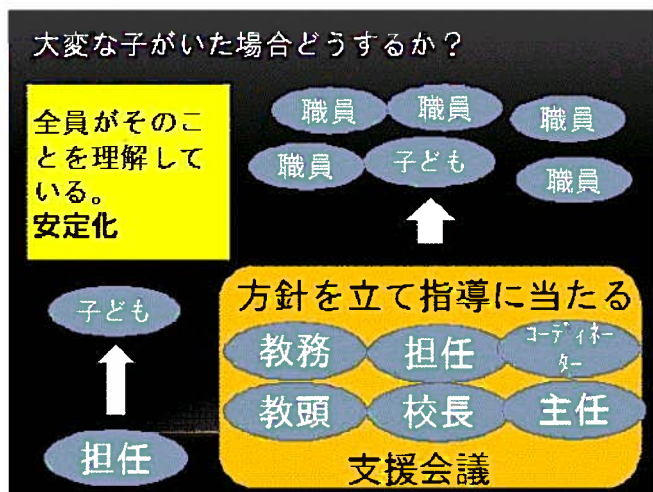
子どもの状態が悪いときは、家庭でも問題を抱えている場合が多い。保護者が困っている

時がある。保護者から話を聞くだけで半分以上の前進。

面談のポイント

- | | |
|----------------------|--------------|
| 1. 必ずお茶を出せ。(雰囲気柔らかく) | 2. 会の規定をせよ。 |
| 3. 困り感を前面に出せ。 | 4. 共感, 傾聴せよ。 |
| 5. 方針を一つ提案せよ。 | |

5 教師への支援



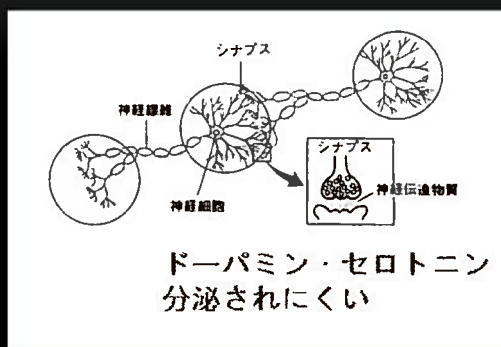
大変な子がいた場合、組織で対応する。

- (1) 校内支援会議を開き、子どもへの対応方針を決める。
- (2) すべての教職員にその対応方針を周知する。職員全員がその子のことを理解し、対応についても知っている状態にする。
- (3) 担任が一人に対応するとか、職員の中でその子のことを知らないという状態をなくす。

セロトニンファイブ

- ① 見つめる
- ② 微笑む
- ③ 話しかける
- ④ 触る (触れる)
- ⑤ ほめる

発達障害の子の脳構造



シナプスには隙間があり、神経伝達物質のセロトニン・ドーパミンが分泌され情報を伝達する役割を果たす。発達障害の子の脳は、情報を伝達するセロトニン・ドーパミンが分泌されにくいということが分かっている。したがって、それらが分泌されやすいような対応が必要。

6 保育園・幼稚園との連携

(1) 1学期・2学期

幼稚園・保育園の先生が小学校に授業を見に来る。
幼稚園の給食試食会と幼稚園児への授業。

(2) 夏休み・冬休み

コーディネーターが保育園に行き、授業をする。
その後、保育園の先生方に子どもへの対応の話をする。

(3) 3学期

保育園・幼稚園児が体験入学に来る。

年間を通じて保育園・幼稚園の公開研参加や行事等の相互参観



【扇田保育園での授業風景】